

明治大正期に

活躍した

作家・シヤ

ナリスト

たちの登場

の仕方、

その背景について項目別に

解説する。「日常」の貴重なエピソードを

掘り起こすことにより、作品の成り立ち

や歴史的

メテア

知られざる文壇ばなし

事件の真相を知らしめ、

発祥の舞台「東京」の残像を浮び上らせる。

巖谷小波を父に持つ交友の広さと長年にわたる

文芸活動の蓄えが、残された資料に

息を吹きこませて、文壇創世の人間

模様を

生き生きと再現させた、
懐しい東京物語である。



巖谷大四

東京文壇事始

田山花袋...永井荷風...二葉亭四迷...

三遊亭円朝...鍋木清方...与謝野晶子...

内田魯庵...石川啄木...谷崎潤一郎...

炎島寒月...岸田吟香...成島卯北...



角川選書

巖谷大四
東京文壇事始



東京文壇事始

昭和五十九年十二月十日

著者——巖谷大四

© Daishi Iwaya 1984

Printed in Japan

初版発行



発行者——角川春樹 発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三三 郵便番号〇三 振替東京二一五〇六

電話 営業〇三三八八五三 編集〇三三八八五二

装幀者——杉浦康平 協力——赤崎正一

印刷所——新興印刷株式会社 外装印刷——旭印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

定価はカバーに明記してあります

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

東京文壇事始

巖谷大四



角川選書

152

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

*

東京文壇事始

巖谷大四

目次

麴町・神田篇

樋口一葉	八	鹿鳴館	五
田辺花圃	四	開花楼	七
明治女学校と巖本善治	七	依田学海	六
高田半峰と坪内逍遙	二	快楽亭と蒲原有明	三
硯友社と『我楽多文庫』	四	大塚楠緒子	三
山田美妙	三	寺田寅彦	二
巖谷小波	五	『文学界』と島崎藤村	四
石橋思案	元	佐佐木信綱と竹柏会	七
江見水蔭	三	錦輝館	六
『二六新報』	四	三崎座と市川九女八	四
岡本綺堂と新富座	四	二葉亭四迷と「浮雲」	七

学習院と有島武郎—— 〇〇

『ホトトギス』と高浜虚子—— 〇三

瀬沼夏葉とニコライ堂—— 〇六

日比谷公園と松本楼—— 〇九

『明星』と与謝野晶子—— 一〇三

武者小路実篤と『白樺』—— 一〇五

日本橋・京橋篇

日本橋—— 一三三

淡島寒月—— 一三三

銀座八丁—— 一三九

岸田吟香と『東京日日新聞』—— 一四一

成島柳北と『朝野新聞』—— 一五三

仮名垣魯文と『仮名読新聞』—— 一五五

北村透谷—— 一五七

子安峻と『読売新聞』—— 一五九

東京座—— 一〇九

山川菊栄と閩秀文学会—— 一三三

雨声会—— 一五五

水原秋桜子—— 一六六

帝国劇場—— 一三三

長田秀雄・幹彦兄弟—— 一三六

尾崎紅葉—— 一六六

島崎藤村—— 一三三

京橋区八官町と永井荷風—— 一三九

京橋区八官町と巖谷小波—— 一四一

村山龍平と『朝日新聞』—— 一六三

幸田露伴と『国会』—— 一六五

岩谷松平と村井兄弟—— 一六八

徳富蘆花と民友社—— 一七〇

黒岩涙香と『萬朝報』	一四	函館屋	三〇
『郵便報知新聞』と村上浪六	一七	博文館	三四
木村屋の餡パンと田山花袋	二〇	丸善と内田魯庵	三四
資生堂	二〇	三越呉服店	三四
十字屋と戸川残花	二六	長谷川かな女	三五
『風俗画報』と山本松谷	二九	カフェ・プランタン	三五
『やまと新聞』と三遊亭円朝	三三	カフェ・ライオン	三五
楠木清方と烏合会	三六	石川啄木と朝日歌壇	三六
『中央新聞』と江見水蔭	三九	谷崎潤一郎	三六
歌舞伎座	三三	偕楽園	三六
明治座	三六		

あとがき	二九
参考文献	三七

麴町・神田篇

樋口一葉

七歳のとき、三日で読み上げた「八大伝」

明治十一年、郡区町村編制法が定められて麴町区が出来た。それは昭和二十二年、神田区と合併して千代田区となる。麴町区の範圍は、皇居を中心に現在の千代田区麴町、有楽町、丸の内、霞が関、平河町、富士見、九段、飯田橋など七十九町である。神田区も同じで、その範圍は、現在の千代田区東部の神田の冠称のつく地区と、猿樂町、三崎町、一ツ橋など百二十七町である。

麴町区内幸町一丁目一番地に東京府庁舎（元大和郡山藩柳沢邸、現在の第一勧銀のある処）があった。その構内の官舎に、明治五年五月二日、樋口一葉（本名なつ、一八七二—一九六）は生まれた。元甲府御勤番だった父為之助（後に則義と改名）がその頃東京府少属だったからである。しかし、生まれた年の八月に下谷練堀町、三歳の時に麻布三河台町、五歳の時に本郷六丁目、十歳の時に下谷御徒町、十三歳の時に下谷西黒門町、十七歳の五月に芝高輪北町、同九月に神田表神保町、十八歳の三月に神田淡路町、同九月に芝西応寺町、十九歳の時に本郷菊坂、二十二歳の時に下谷龍泉寺町、二十三



歳の時に本郷丸山福山町と、二十五年の生涯に十二回も転居している。

一葉は幼い頃から本が好きでよく読んだ。父はそれを喜んだが、母は「女に学問はいらぬ」と言つて、そんな娘を叱つた。母の眼を逃れて、土蔵にかくれ、窓からさす薄明かりをたよりに草双紙類を読みふけた。そのためひどい近眼になり、眼鏡をかけていた。七歳の時、馬琴の「八大伝」を三日で読み上げたという。

へ七つといふとしより草双紙といふものを好みて、手まりや羽子はじこをなげうちてよみふけるが、其中にも一と好みけるは英雄豪傑の伝、任侠義人の行為などの、そよろ身にしむ様に覚えて、凡およて勇ましく花やかなるが嬉しかりき。かくて九つ斗ぶたりの時よりは、我身の一生の世の常にて終らむことなげかはしく、あはれ、くれ竹の一ふしぬけ出いでしがたとぞあけくれに願ひける（日記「塵ちりの中」）

明治十六年十二月、青海学校小学高等科第四級を首席で卒業したが、上級には進まず退学した。母が家事見習いをさせようとしたからである。父は進学を主張したが母に押し切られた。そこで父は、自分の知人である和田重雄に頼んで和歌の指導を受けさせた。

明治十九年八月、中島歌子（一八四一—一九〇三）が開いていた小石川安藤坂の「萩はぎの舎や」という歌塾に入門した。「萩の舎」は当時全盛期で、門下千人と言われ、その中には梨本宮妃、鍋島、前田侯爵夫人、英学者乙骨耐軒の娘まき子、元老院議員田辺蓮舟の娘花圃など良家の子女、才媛さいえんがいた。

打ちなびくやなぎを見ればのどかなる おぼろ月夜も風はありけり

これは一葉が十六歳の時、「萩の舎」の発会で、「月前柳」という兼題で最高点となった歌である。

「かれ尾花一もと」という習作を書いたのは明治二十四年一月、二十歳になった時である。四年前、先輩の田辺花圃が「藪の鶯」という小説を金港堂から出版した。二十歳の時である。一葉も二十歳になったら小説を書こうと思った。それがこの習作である。この年の秋、「森の下岬」という随想に、はじめて一葉というペンネームを使用した。達磨が一枚の草の葉に乗って中国に渡ったという中国の故事にちなんだもので、達磨には足がないから、「おあしがなし」と、自分の貧乏をしゃれのめしたものだという。

その年の四月十五日、一葉は、南佐久間町に住む『東京朝日新聞』の小説記者半井桃水（本名例・幼名泉太郎、一八六〇—一九二六）を訪れ、弟子入りした。妹のくにの友達野々宮きくが橋わたしをしたのである。きくは半井の妹幸子と築地の府立高等女学校で同級生だった。

半井桃水は明治二十五年三月、雑誌『武蔵野』を創刊した。その創刊号に、一葉は「闇桜」という短編を発表した。それが一葉の、活字になった最初の小説である。

半井桃水への慕情

一葉の母たきは、一葉が小説を書くようになると、その小説が早く金になることを待ち望んだ。

しかし「閨桜」も、次に田辺花園の推輓で『都の花』に載った「うもれ木」（明25・11）も、活字にはなつたが金にはならなかつた。

〈我家貧困日ましにせまりて、今は何方より金かり出すべき道もなし。母君は只せまりにせまりて、我が著作の速かならんことぞの給ひ、いでや、いかに力尽すとも世に買手なきときはいかゞはせん〉（『日記』明26・3）

小説では食べて行けないと観念した一葉は、その年の八月、下谷龍泉寺町に移り、着物を売り、知人から金を借り、それを元手に荒物雑貨屋をはじめた。吉原通いの人力車の通る賑やかな通りに面していたので、はじめのうちは結構繁昌した。しかし、半年もたたないうちに売り上げが落ちちになり、仕入れの金にも困るようになった。

〈唯かく落はふれ、行ての末にうかぶ瀬なくして朽も終らば、つひのよに斯の君に面を合はさる時もなく、忘れられて、忘れられて、我が恋は行雲のうはの空に消ゆべし〉（『日記』明27・2）

「斯の君」とは半井桃水のことである。哀しみと苦しみのどん底であつた。

しかし、これらの辛い体験は、一葉の文学の貴重なもととなつた。哀しみの底から、再び文学への情熱が燃えたぎりはじめたのである。

明治二十七年五月一日、一葉は店をたたんで、本郷丸山福山町に移り、そこで再び小説を書きはじめた。「閨桜」の次に書いた「うもれ木」が注目され、『文学界』同人の平田禿木（本名喜一郎、一八七三—一九四三）の依頼で前年に「雪の日」を同誌に発表しており、ぼつぼつ文壇の一部に認めら

れはじめていたのである。

丸山福山町で最初に書いた作品は『文学界』に寄せた「暗夜」である。この頃から、『文学界』同人の馬場孤蝶（本名勝弥、一八六九—一九四〇）、戸川秋骨（本名明三、一八七〇—一九三九）、島崎藤村（本名春樹、一八七二—一九四三）らがよく訪れるようになった。

そして明治二十七年十二月には「大つごもり」（『文学界』）、二十八年一月から翌年の一月にかけて「たけくらべ」（同）を断続的ながら連載して、一躍文名が高まった。

△「大つごもり」から「たけくらべ」最終回までの十四カ月を、私は「奇蹟の十四カ月」と称した。この中に一葉の代表作と見られる「大つごもり」「にぎりえ」「十三夜」「わかれ道」「たけくらべ」がはいっているからである。（和田芳恵『樋口一葉』）

ますます若い作家の来訪が多くなった。川上眉山（本名亮、一八六九—一九〇八）、斎藤緑雨（本名賢、一八六七—一九〇四）もひんばんに訪れた。眉山は一葉に心惹かれ、婚約したと言いふらしたりした。一葉は腹を立てた。緑雨がよくやって来るのを、半井桃水が気に病んで、

「緑雨には用心した方がいい」と忠告した。緑雨は緑雨で、

「集まって来るやくざ文士どもを追い払いたまえ。彼らは貴女にとって油虫だ」と、おためごかしを言った。

一葉はこういう若い連中にかこまれて、悪い気持ちはしなかった。眉山や禿木のような秀才青年よりも、緑雨のような、ひとくせもふたくせもあるひねくれ者にむしろ興味を抱いた。

しかし、初恋の人半井桃水はやはり別格であった。「日記」にも、最後まで慕情をしたためている。だがその恋情も結局はみのらなかつた。次々に秀作を発表していた一葉は、脂の乗りかけたところで、胸を侵され、明治二十九年十一月二十三日、二十五歳の若さで世を去った。

へ身はもと江湖の一篇舟、みづから一葉となつて、芦の葉のあやふきをしるといへども、波靜かにしては釣魚自然のたのしみをわするゝあたはず。よしや海龍王のいかりにふれて、狂らん、たちまち、それも何かは、

さりとはの浮世は三分五里霧中（「花紅葉一の巻」）
これが遺書である。

一葉は、近代女流作家でそれを職業とした最初の作家であった。

田辺花圃

「藪の鶯」の稿料は兄の法要の費用に

田辺花圃（本名龍子、一八六八—一九四三）は明治元年十二月二十三日、東京本所番場の田辺別邸に生まれたが、間もなく父が麴町に豪邸を構えたのでそこで育った。

田辺家は代々与力で、祖父新次郎は石庵と号する漢学者、父太一も蓮舟と号して漢詩文をよくした。花圃が生まれた時は、丁度明治改元の年で、旧幕臣である太一は、江戸城警備の目付役を退いて隠棲していたが、間もなく新政府に認められ、外務書記官から大書記官、元老院議員、錦鶏問祇候と栄進した人である。

そういう家庭に生まれ育った花圃は、八歳で麴町小学校に入り、二、三か月後に、神田にあった跡見花蹊の塾に入って書道を学んだ。花圃と号したのは花蹊にちなんだものである。またこのころ、父と知り合いの歌人伊東祐命に国学と和歌を学び、その縁で中島歌子の「萩の舎」に入った。そのころ、

